

デジタルと掛けるダブルメジャー大学院教育構築事業 令和4年度選定事業 中間評価結果の総括

令和8年3月17日
デジタルと掛けるダブルメジャー大学院教育構築事業委員会

1. 事業の背景・目的

我が国において、国際社会の潮流を踏まえ、国内外におけるアカデミック・ノンアカデミックでの活躍を意識した学位プログラムが不足する中、医理工農学など自然科学系分野に加え、経済学、経営学、公共政策、教育学、法学など人文社会科学分野においてもデータサイエンス・コンピュータサイエンスの素養への需要が増加していることから、「専門分野×データサイエンス・コンピュータサイエンス」を修めた修士・博士の輩出は、Society5.0やDX（デジタル・トランスフォーメーション）の実現のために喫緊の課題となっていた。こうした背景から、文部科学省にて検討がなされ、「デジタルと掛けるダブルメジャー大学院教育構築事業」（以下「本事業」という。）が誕生した。

上記を踏まえ、本事業の目的としては、アカデミック・ノンアカデミックにおいて、人文社会科学系分野等に数理・データサイエンス・AI（以下「MDA」という。）分野の要素を含む学位プログラムを設定した、人材を育成する取組を支援することとして開始された。

2. 中間評価の趣旨、実施方法

令和4年度の公募では6件の事業が選定され、各事業が展開されていた。この度、補助期間開始から4年目にあたることより、公募要領にて予定していたとおり、中間評価を実施した。これにより、各選定大学の取組の進捗状況等について評価を行い、その結果を各大学に示し適切な助言を行うとともに社会に公表することで、人文・社会科学系等の分野を専攻する研究科等において多様な分野とMDA分野と掛け合わせた文理横断的な教育の実施・展開を促進し、専門分野に応じた高度なMDAの知識・技術を習得した社会から求められる各分野をけん引するデジタル人材を継続的に輩出し、多様なイノベーションを創出に資することを目的に行った。

その際、5つの評価項目（「（1）事業の実施体制、（2）事業の具体的な取組の進捗状況、（3）事業の実実施計画・継続性、事業成果の普及、（4）選定時に付された留意事項及びフォローアップ報告書への対応、（5）経費執行の適切性」）の観点により、実施した。

なお、これらの評価決定までのプロセスについては、「令和4年度選定事業中間評価要項」及び「令和4年度選定事業中間評価 現地調査実施要領」等に基づき、原則として令和6年度末までの取組の進捗状況等について、書面評価及び現地調査を実施し、その結果を総合的に勘案し、委員会での審議のうえ決定した。

3. 中間評価結果

評価・評語は以下5区分で判定した。

| 評価 | 評語 |
|----|---|
| S | 計画を超えた取組であり、現行の努力を継続することによって本事業の目的を十分に達成することが期待できる。 |
| A | 計画どおりの取組であり、現行の努力を継続することによって本事業の目的を達成することが期待できる。 |

| | |
|---|---|
| B | 一部で計画と同等又はそれ以上の取組も見られるものの、計画を下回る取組があり、本事業の目的を達成するには、助言等を考慮し、一層の努力が必要である。 |
| C | 取組に遅れが見られるなど、総じて計画を下回る取組であり、本事業の目的を達成するためには、当初計画に基づく目標の早急な達成や事業規模の縮小等に向け、財政支援の縮小を含めた事業計画の抜本的な見直しが必要である。 |
| D | 現在までの進捗状況に鑑み、本事業の目的を達成できる見通しがなく、選定大学への財政支援を中止することが必要である。 |

評価結果は、A評価3件、B評価3件とした。

本委員会では令和5年度及び令和6年度に全選定事業計画に対して、進捗状況の確認や助言等を行うフォローアップを実施してきた。そうした中で、当該助言等を真摯に受け止め、各大学がそれぞれの計画に基づき改革を進められてきたこと、また、申請時に掲げられた計画や目標の達成、本委員会から付された助言等に対して、熱心に対応されていることは確認できた。

一方で半数の事業計画が一部で計画と同等又はそれ以上の取組も見られるものの、計画を下回る取組があり、本事業の目的を達成するためには、助言等を考慮し、一層の努力が必要とされる評価となった。事業最終年度までの目的達成に向けて、一層取組を加速されることを期待したい。

なお、今回の中間評価時点において、顕著な成果と考えられるものは以下のとおりである。

- ビジネス課題の解決を想定したPBL型授業や社会人向け教材の開発・提供等により、企業現場で即戦力として活躍できる人材の育成を見据えたカリキュラムが構築されたこと。また、その教材を社会人のリスキリングツールとして自大学以外にも公開したこと。
- 経済学×データサイエンスの新専攻設置に当たり、従来のMBAとは異なる点について明確化し、新規性を備えたものとして更なる充実を図るため、海外の主要大学で提供されている大学院のコースを参考に、カリキュラムが構築されたこと。
- eラーニングを教材として組み込むだけでなく、データサイエンス教育の質の向上のために、小中高大学等に展開することで、学習者のデータを継続的に集約することを可能としたこと。また、eラーニングを活用した収益モデルの構築により、補助期間終了後の継続を意識した計画がなされていること。
- 学生1名に対して主指導教員と副指導教員がつく体制の構築や、ラーニングマネジメントシステムの活用等により、学修成果・教育成果の把握・可視化を可能としたこと。
- トランスファラブルな力を育むために、企業と学部学生への大規模なアンケートを行い、その結果を踏まえて、大学と学生と企業等の関係者が協働できる場を、整備したこと。
- 国際アドバイザーボードや国際認証機関の活用を通じた外部有識者の視点を取り入れるための仕組みが構築されたこと。

一方で、今後期待したい取組は以下のとおりである。

- 全ての選定事業において、中間評価実施年度である令和7年度までに構築された学位プログラム及び新設・拡充されたプログラム（以下「学位プログラム等」という。）へ学生を受け入れていることは確認できたが、多くの大学において学生確保に苦慮している様子が窺えた。広報活動の期間や機会が十分でなかったことも要因と推察されるが、学部から直接進学してくる学生や社会人学生に対して、何が学べて、どのような進路につながるかを明確に示せていないように感じた。改めて各大学において養成する人材像の明確化をするとともに、当該内容を各事業計画の主旨と合わせて学内外へ積極的に広報展開すること等により、創意工夫を凝らし、認知度の向上と学生確保に努めていただきたい。
- 本事業は人文社会科学系等の分野においても、データサイエンス・コンピュータサイエンスの素養への需要が増加していることより開始されたところ、展開されているカリキュラムへのデータサイエンス等の教育の組み込みについては、量・質ともに改善の余地があると思われた。大学院レベルでの体系的で高度な教育プログラムとして、文理横断的なデジタル人材の輩出が可能なものとなるよう、分野融合の教育を実施するなど事業の趣旨を踏まえた、カリキュラムの弛まぬ改善が望まれる。
- 各大学がこれまでに培ってきたデータサイエンス教育や産学連携に関する知見や資産を積極的に活用するとともに、関係部署とも密接に連携することにより、教育内容の改善や産業界を含めた多様なチャンネルへの戦略的な広報活動の展開を図っていただきたい。
- 残り2年間で本事業が終了することを踏まえて、補助期間終了後も見据えた取組を加速する必要がある。展開されている学位プログラム等への安定的な学生確保や外部資金獲得等の道筋をつけるためにも、企業・行政等とのさらなる協働・連携が望まれる。

4. 終わりに

事業計画に基づき取組を遂行する各大学においては、本委員会より付された評価結果に挙げられた課題等について確認・対応いただくとともに、他の選定事業計画に対して付されたコメントも参考にしつつ、取組のより一層の充実を求めたい。

また、令和7年2月に中央教育審議会において取りまとめられた「我が国の「知の総和」向上の未来像 ～高等教育システムの再構築～（答申）」において、今後の高等教育政策の方向性と具体的方策や目指す姿を実現するに当たって重要となる観点が触れられているところ、教育研究の「質」の更なる高度化に向けての大学院教育の抜本的な充実や、人文・社会科学、自然科学などの様々な学問分野を横断的に学ぶ文理横断・文理融合教育の推進等、本事業が先行して実施してきた取組が、高等教育機関が今後目指す方向性と一致していることが確認できる。

各選定大学においては、更なる取組等を加速していただき、本事業により開発された教育プログラムや蓄積されたノウハウを、モデルケースとして他大学へ普及していただくことを期待する。

以上

デジタルと掛けるダブルメジャー大学院教育構築事業
令和4年度選定事業中間評価結果 一覧

◆令和4年度選定事業

| 番号 | 代表校名 | 事業名 | 総括評価 |
|------|---------|---|------|
| 2201 | 滋賀大学 | データサイエンス×経済・教育（DS×E2）高度専門人材養成プログラム | A |
| 2202 | 岡山大学 | 教育学×データサイエンスで人間・社会・文化の未来を拓く先駆者養成クロスプログラム | A |
| 2203 | 広島大学 | 人文社会科学分野におけるDX推進エキスパート人材育成のための大学院新学位プログラム ～教育データサイエンスプログラムとソーシャルデータサイエンスプログラムの設置～ | B |
| 2204 | 九州大学 | ウェル・ビーイングの実現に貢献する高度人文情報人材養成プログラム：人文学×データサイエンスによる「人文情報学」大学院の設置 | B |
| 2205 | 東北学院大学 | 東北の地域経済発展を担うデータサイエンス人材育成事業 | A |
| 2206 | 名古屋商科大学 | DX時代のリーダー育成を担う「MBA x データサイエンス」ダブル・ディグリー教育課程 | B |

【参考】評価及び評語の定義

| 評価 | 評語 |
|----|---|
| S | 計画を超えた取組であり、現行の努力を継続することによって本事業の目的を十分に達成することが期待できる。 |
| A | 計画どおりの取組であり、現行の努力を継続することによって本事業の目的を達成することが期待できる。 |
| B | 一部で計画と同等又はそれ以上の取組も見られるものの、計画を下回る取組があり、本事業の目的を達成するには、助言等を考慮し、一層の努力が必要である。 |
| C | 取組に遅れが見られるなど、総じて計画を下回る取組であり、本事業の目的を達成するためには、当初計画に基づく目標の早急な達成や事業規模の縮小等に向け、財政支援の縮小を含めた事業計画の抜本的な見直しが必要である。 |
| D | 現在までの進捗状況に鑑み、本事業の目的を達成できる見通しがなく、選定大学への財政支援を中止することが必要である。 |